The Japan Society of Educational Sociology



## 書　評

亀山佳明 著
# 『子どもの嘘と秘密』

常葉学園大学　瀬 戸 知 也

本書は，著者が1981年から89年までの間に，さまざまな媒体を通じ発表してきた11篇の論文を補正し編集したものである。それぞれに発表の形式を異にしながら，全体を通じて一貫したねらいがみられる。それは著者自身が本書のあとがきで述べているように，「子どもの社会学的人間学」の試みとしての一貫性である。

では先ず，各部（四部構成）の内容を紹介しよう。

**第Ⅰ部**。研究のトピックは，子どもとうその関係である。先ず，柳田国男らの指摘をふまえ，うそを「現実（事実）とは異なるフィクションを構成し，それを意図的に（すなわちわかっていて）使用する行為」（７頁）と定義する。特に子どものうそを特徴づけるものとして「遊びのうそ」と「防衛の（ための）うそ」とに注目する。「遊びのうそ」とは，空想のうそであり，ベイトソンらのいうメタメッセージ（「これは空想だ」）を操る次元をもったうそであり，ミンコフスキーにならって「生きられるうそ」と著者が呼んだ子どもに特有のうその次元である。一方，「防衛のうそ」は，子どもの自我の成長にかかわる。大人たちの監視の視線から自らを守り，自己の自由を得るための方策としてのうそである。これら子どもに必要不可欠なうそが，近代市民社会における＜正直モラル＞のイデオロギーの浸透のなかで次第に衰退させられてゆくことに著者は疑問をなげかける。子どものうそがもつ豊かさ（「生きられる」次元）の意味を見直す必要性を説く。

**第Ⅱ部**では，近代産業社会の諸制度が内にはらむ問題性―パラドクスやディレンマ―がとりあげられる。先ず，豊かな社会＝高度消費社会における人間の幸福の問題をめぐって，ジラールの「欲望の三角形」理論やボードリヤールの「慢性的アノミー」などの検討をもとに，「＜幸福＞の＜強制＞」にいたるパラドキシカルな社会状況が確認される。続く二つの論文は，近代空間としての学校の問題性を，「暴力」と「子どもの自死」に焦点づけて論じる。前者は，デュルケームの道徳教育論を導き手としつつ，ジラールやバランス理論などを援用し，体罰，対教師暴力，けんか・いじめなどの学校（学級）における暴力生起の仕組みとその根拠を解明する。こうした考察から明らかになるのは，「『自主的に行為せよ！』という逆説的命令」（91頁）に代表される近代学校教育のパラドクスである。一方，後者では，規律・訓練的権力（フーコー）やダブルバインド状況（ベ



NII-Electronic Library Service

The Japan Society of Educational Sociology

イトソン）の装置としての学校において，その「逆説的権力の狡知」に気づいたがゆえに「自死」への途を歩まざるを得なかった子どもたちの意味世界の解釈が試みられる。そして四つめの論文では，子どもの社会化の問題を，(1)相互作用の観点と(2)社会構造の観点から検討する。(1)では，ベイトソンのいう「分裂生成」の危機を調節回避する役割として「社会的オジ」という社会化の準拠者が提案される。(2)においては，近代産業社会の構造的ディレンマとして「自律と依存」「協同と競争」の各ディレンマが子どもという地位に課せられており，「分裂生成」が導かれやすいことが確認される。(1)と(2)をふまえて著者は，「近代産業社会に生きる子どもたちこそもっとも『調節者である社会的オジ』を必要としている」(140頁）と結論づけている。

**第Ⅲ部**の研究のトピックは，子どもの性愛的経験である。最初の論文は，解釈学的な立場（方法）に立ち，フロイト理論や社会構造論を援用しつつ，M. ミードによる思春期の性愛的経験に関する問題提起を検討・補足する。性的拡散の四類型（結合的・向上的・道具的・溶解的関心）や，性愛的行動の四類型（充足型・経験先行型・神経症型・強迫型）などの吟味を通じ，サモア社会にもアメリカ社会にも原抑圧からくる精神的緊張が同じように課される一方，高度産業化社会には特有の「過剰抑圧」(マルクーゼ）が加重されていることを明らかにする。もう一方の論文では，そうした「過剰抑圧」社会のなかで現代青年が置かれている性的アノミー状況が検討される。著者は，ナルシスたる現代日本の青年たちの性愛的経験を単にアイデンティティ（近代的自我）の欠如とだけは考えない。「ナルシスたちの性愛の特徴，たとえば対象や目標への執着心のなさは，個人主義的な性愛を超越する可能性をはらんでいる」(177頁）ことに注目する。

**第Ⅳ部**。研究のトピックは自己変容のコミュニケーションである。先ずベイトソンのコミュニケーション理論を(1)サイバネティックス認識論と(2)論理階型論の二つの側面から検討する。(1)では自己言及（相互因果，円環）的システムとしての認識＝行為論が確認される。(2)では，メッセージとメタメッセージの二重学習からなる世界の認知が，学習Ⅰ・Ⅱ・Ⅲへと多層構造的に積み上げられること，つまり，単一の行為（学習Ⅰ）は，そのパタンの学習（学習Ⅱ）によって自己を組織し，さらに上位のレヴェルにおいて「自己の入れ替え」(学習Ⅲ）が起こることが説明される。(1)と(2)より「自己の二重サバイネティックスモデル」が設定され，自己変容は全体（エコ）システムを介することで可能になることがわかる。芸術的経験も宗教的経験も「より大きな回路を通して部分がいやされる」(206頁）のである。最後の論文は（まるで一つの円環をなすように），子どもの秘密を子どものうそと対比しつつコミュニケーション活動の一つの様式と位置づけ，非聖化された社会における子どもの自己変容の問題を議論する。その結果，われわれの住む近代産業社会は「宗教的古層の上に非聖的新層がのった意味の層を形成しているために，古層と新層の間



NII-Electronic Library Service

The Japan Society of Educational Sociology



に齟齬が存在」(235頁) し，ディレンマとなって子どものイニシエーションの病理をうみだしていることが明らかとなる。

以上が概要である。次に，本書の意義と疑問点をめぐって，若干のコメントを加えてみたい。

1. 本書は何か新しい事実を読者に伝えているわけではない。子どものうそも秘密も暴力も性愛も，われわれはそれらの事実をよく知っている。本書の意義は，そうしたよく知られた事実への接近の仕方（方法）の独自性にある。いわゆる実証主義的な方法や前提に頼ることなく，存在論・認識論のレヴェルの検討をふまえ，深層レヴェルをも視野にいれた探究を行っている点に先ず意義を見いだせる。たとえば類書が別々に扱うことの多い体罰・対教師暴力・いじめの問題を同一の説明図式で解釈する試み（「学校と暴力」）もその一例といえるだろう。

2. 著者のそうした方法（立場）を支える理論的背景は，フロイトであり，デュルケームであり，ベイトソン，ジラール，フーコー，ギアーツ，作田啓一らの理論である。彼らに共通するのは（そして著者自身とも共通するのは），その知の脱領域性であり，著者がいうような「人間学」的な学際性である。もちろん各問題にたいする切口（視角）や解釈の基本的枠組には，社会構造論が組み込まれており，充分に「社会学的」である。著者は，社会学的な探究を基本に置きながらも，やがて社会学を「突破する」ことを念頭においた論の組み立てをしている。その点に従来の社会学（教育社会学）的探究にたいする一つの問題提起としての意義を見いだせよう。

3. また，探究の中身において，各種の文学作品が豊富に引用され丹念に検討されている点も特徴的である。その意味では，広義の文学社会学の研究のうちに位置づけられもしよう。しかし著者は，文学作品の内容分析や，社会的評価などに関心をしめすのではなく，各分析の結果わかった問題性を「乗り越える」力を文学作品の記述のなかに探り出している点でユニークである。たとえばオドラデク（「小さなものへの変身」）にしてもコールフィールド少年（「社会的オジの不在」）にしても，物語のシステムを介することによって，いわば問題が＜再び生き直される＞ような効果がうまれている。

他にも多くの意義が見いだせるものと思われるが，次に疑問点を述べたい。

4. 先ず，内容の問題として，人間のコミュニケーションの普遍的側面についての吟味と比べると，文化的特殊性の問題に関する吟味（位置づけ）が曖昧なままに残されているように思われた。たとえば柳田国男のいう「ウソ」とオスカーワイルドのいう「虚言」との一致を充分な吟味を経ずに前提して論を進める（「子どものうその衰退」）ことは問題を過度に単純化するおそれがあるだろう。うそに限らず暴力や自死にしても，日本文化による被拘束性を充分に検討し位置づけることなく近代産業社会論を展開してしまうと，特殊日本における近代の問題をとらえ損なう危険性もでてくるのではなかろうか。



NII-Electronic Library Service